怪談牡丹灯籠　三遊亭円朝

作者

三遊亭円朝

本名は出淵次郎吉。江戸の湯島切通片町（現在の文京区湯島四丁目）に生まれる。父は落語家の橘屋円太郎。七歳の時に小円太の名で寄席に初出勤し、父の師匠である二代目三遊亭円生に入門。十三歳の時に浮世絵師歌川国芳のもとで絵を学ぶ。二十歳の頃に道具を用いる鳴り物入りの噺を工夫する。寄席に出勤した折、円朝の用意した噺を師匠の円生が先に演じてしまうことが続き、それをきっかけに自ら噺を創作するようになったとされる。二十一歳の時に初めて創作した怪談噺「累ね草紙」は、現代に伝わる「真景累が淵」の原型かと推察されている。明治三十三（一九〇〇）年に六十二歳で死去、谷中の全生庵に埋葬された。代表作に「怪談牡丹灯籠」「真景累が淵」のほか、「塩原多助一代記」「怪談乳房榎」「名人長二」「心眼」などがある。

円朝の口演した噺の多くは明治十五（一八八二）年頃から普及する速記術によって書き取られ、単行本（速記本）や新聞連載のかたちで発表された。全集に、春陽堂版「円朝全集」（昭和元～三）、角川書店版「三遊亭円朝全集」（昭和五十～五十一）、岩波書店版「円朝全集」（平成二十四～二十八）がある。詳しい年譜は岩波書店版「円朝全集」別巻二を参照されたい。

出典

本文は「円朝全集」第一巻（岩波書店　平成二十四）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

『怪談牡丹灯籠』の初出は明治十七（一八八四）年に東京稗史出版社から出版された全十三編の単行本である（三遊亭円朝口演・若林玵蔵筆記）。旗本の飯島平左衛門と下男の黒川孝助を中心とする敵討ちの物語と、平左衛門の娘お露と浪人の萩原新三郎を中心とする怪談とが交互に語られる構造になっており、掲載箇所はお露・新三郎の怪談の一部である。

東京稗史出版社から同年に出版された別製本には、春のやおぼろ（坪内逍遙）が序文を寄せており、「句ごと文ごとにうたた活動する趣ありて、宛然（さながら）まのあたり萩原某（それ）に面合はするが如く阿露（おつゆ）の乙女に逢見る心地す」と、作中人物をありありと描き出す円朝の芸を称賛している。

語句の研究

●一七九ページ

下14 蚊帳　就寝時に寝床へ蚊が来るのを避けるために、室内に吊って用いるもの。麻製のものが一般的。

下15 節穴　木の板の節の部分が抜けてできた穴。

キー・ポイント　下15 牡丹花の灯籠　牡丹の花の飾りがついている灯籠。灯籠は、枠に紙を貼ったものの中に灯火を入れた照明具。屋外で用いる。この場面は八つ（午前二時頃）の出来事を描いている。深夜、女中のお米が灯籠を手に提げ、主人のお露の足もとを照らしながら歩いてくる。暗闇のなかに、灯籠の花飾り、振り袖の秋草模様、長襦袢の緋色など、華やかな装飾や色彩が照らし出されている様子を想像しながら読みたい。

下16 文金の高髷　文金高島田。武家の女性が結う髪型。ここではお露が文金の高髷に結っている。

下17 緋縮緬　緋色の縮緬。緋色は濃い赤色。縮緬は絹織物の一種で、布地の面に細かなでこぼこがある。

下17 長襦袢　襦袢は和服を着る際に肌着として着るもの。上半身から腰あたりまでの長さのものを半襦袢といい、上半身から下半身までの長さのものを長襦袢という。

下19 焼熱地獄　原文の表記は「焼熱地獄」だが、仏教語としては「焦熱地獄」が正しい。焦熱地獄は八大地獄の一つで、殺生・偸盗・邪婬・妄語・飲酒・邪見の者がおちる地獄。

キー・ポイント　下20 御札　御符。新三郎が新幡随院の良石和尚から幽霊除けとして授けられたもの。

下20 陰鬼　幽霊。

鑑賞

まずは、冒頭から「焼熱地獄に墜ちたる苦みです」まで、新三郎が戸の節穴から外を見る様子（「新三部は…覗いて見ると」）、新三郎の見た幽霊たちの姿（「毎時の通り…緋縮緬の長襦袢」）、新三郎の心情（「其綺麗な事…苦みです」）が、ひと続きに語られている点に注意したい。語り手は、はじめは新三郎の様子を俯瞰的に語り、途中から新三郎その人になりかわったように語っている。ここには、一人の落語家が作中の情景を描写し、かつ登場人物をも演じるという落語独特の自在な語りが見られる。後半の幽霊たちの描写もこれと同様である。まずはその行動が描写され（「萩原の家は…後へ下がり」）、次いで幽霊どうしの会話になる。会話の場面では、落語家は一人で二役を演じ分ける。

次に、登場人物の心情の対比を味わいたい。前半では新三郎の恐怖心が、後半ではお露の恋情が焦点化されている。新三郎はお露が幽霊であるとは知らずに家に招き入れ、逢瀬を重ねたが、隣人からお露が幽霊であることを知らされると心変わりし、良石和尚から授かった海音如来のお守りを身につけ、幽霊除けの御札を家に貼り、雨宝陀羅尼経を読んで幽霊の来訪を避けようとする。掲載箇所は、新三郎が御札を家に貼った後、蚊帳の中でお経を読んでいると、お露と供の女中のお米が新三郎の家に来るいつもの時刻（八つ＝午前二時頃）になり、二人の足音が聞こえて家の前で止まったので、新三郎が恐怖をおぼえながら節穴から外を見る場面である。新三郎にとってお露は、もはや恋人ではなく恐怖の対象であるが、お露からすれば新三郎の突然の心変わりが理解できない。「逢せてくれなければ私しは帰らないよ」という発言にお露の切ない恋心を見るか、執着心を見るかは、読み手によって分かれるところだろう。正解をひとつに定めず、自分はどう感じるか、なぜそう感じるかを考えさせたい。

なお、牡丹の灯籠を提げた女性（幽霊）が恋人の男性のもとに通う話は明の『剪灯新話』「牡丹灯記」を源流とする。これを翻案した物語に浅井了意の仮名草子『伽婢子』（寛文六）の「牡丹灯籠」があり、円朝はこれに拠っている。詳しくは延広真治「怪談牡丹燈籠」（『幽霊名画集』ちくま学芸文庫）を参照されたい。

（佐藤至子）